

農村における空き家利活用の実践に関する考察

矢ヶ井 那津¹・田中 尚人²

¹正会員 熊本大学大学院 自然科学教育部 博士前期課程 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2 丁目 39 番 1 号)

E-mail: yagai.na25@gmail.com

²正会員 熊本大学大学院 先端科学研究部 准教授 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2 丁目 39 番 1 号)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

国土交通省によると全国で増加している管理不全な空き家による外部不経済は、防災・防犯、衛生、景観など多岐にわたるとされており、持続可能な地域を運営するには空き家利活用を実践しその効果を明らかにすることは有用である。本研究では熊本県美里町で行われた空き家を利用したイベントスペースにおける①周辺住民、②イベント参加者、③イベント企画者を対象にアンケート及びインタビュー調査を行い、空き家利活用の効果について考察した。本研究の目的は、場の設えと参加者の意識変化に着目し、空き家を利活用した域内交流の実態を明らかにすることである。研究の成果として①周辺住民には、「地域への関心の顕在化」、②イベント参加者は「地域の魅力発見」、③イベント企画者は「地域における役割の自認」が検証された。

Key Words: vacant house, coordination of place, Intra-Area Communication, existential place, action research

1. はじめに

(1) 研究の背景・目的

少子高齢化、人口減少社会を迎えるに伴い農村ではコミュニティが脆弱化しており、その維持・再生が喫緊の課題である¹⁾。一方、これらの課題に伴い空き家の増加は著しく、平成 30 年住宅・土地統計調査²⁾によると空き家数 848 万 9 千戸、総住宅数に占める空き家の割合(空き家率)は 13.6%と過去最高となっている。空き家が増加する懸念として国土交通省は、管理不全な空き家などによる外部不経済は、防災・防犯、衛生、景観など多岐にわたるとしている³⁾。今後、持続可能な地域の運営を考えるにあたり、空き家利活用を実践しその効果を明らかにすることは有用である。

また近年、空き家の利活用について二地域居住など関係人口に着目した事例が推進されている⁴⁾。総務省によると、関係人口の関わり方⁵⁾は「より多様な人材が地域づくりに参画」することだとされている。一方、多様な人が参画するだけでなく持続的な関わりを生むためには関わる場の居場所性を高めることは重要であると考えられる。そこで、空き家利活用の効果を明らかにするにあたり、居場所性を高める実践を行うことは実用的である。

そこで、本研究では熊本県美里町で行われた空き家を利用したイベントスペースにおける①周辺住民、②イベント参加者、③イベント企画者を対象にアンケート及び

インタビュー調査を行い、空き家利活用の効果について考察した。目的は、場の設えと参加者の意識変化に着目し、空き家を利活用した域内交流の実態を明らかにすることである。

また、本研究は、地域おこし協力隊が対象事業の担当と研究者を兼任することで、研究者と当事者の協働の実践であったと言える。つまり、矢守⁶⁾による「望ましいと考える社会的状態の実現を目指して研究者と研究対象者とは展開する共同的な社会実践」であるアクションリサーチの側面を持って調査をした。

(2) 既往研究と研究の位置づけ

空き家利活用について筧田ら⁷⁾は地域貢献活動とのマッチングによる空き家の活用推進について、その実態と課題から事業設計や運用を考察した。竹鼻ら⁸⁾は歴史的価値を有する地区に着目し、空き家の利活用の可能性から歴史的景観を持つ都市における空き家の解消方策と歴史資源を活かしたまちづくり方針を考察した。

また、類似研究として武田ら⁹⁾が利用頻度が低下した公共施設の利活用として、地域住民と地域外住民の交流の場づくりに関する実践を通じ、集落住民の意思を尊重して臨機応変に事業を進めることの重要性を考察した。このように、利活用の事例を元に整備や事業の設計、運用に着目した研究が多くなされている。

域内交流について、坂田ら¹⁰⁾は災害復興過程に対して

災害を契機に結成されたコミュニティを事例に都市農村交流、集落連携、被災地間交流を生んだ要因から運営と継続要素を考察した。また、前田¹¹⁾らや井上¹²⁾のように棚田や神事、伝統文化の担い手不足などの課題に対し、集落内部の人のみならず、近隣集落や他地域からの外部者との交流を図ることで担い手を取り込む研究がされている。このように、域内交流から復興や課題解決に寄与する事業の設計、運用に着目した研究は多い。

本研究では、空き家をアクションリサーチにおける共同的社会実践の場と捉え、場の設えがもたらす効果から整備や事業の設計、運用に対して示唆を得る点に特徴がある。

2. 空き家利活用における場の設え

(1) 居場所の概念

まず、本研究における居場所について整理する。元来、居場所の概念は幅広い分野で用いられてきたが、場の視点から堤¹³⁾は「居場所とは自と他が交錯する場のことであり、それを通して自分という感覚が広がったり狭まったりする、力動的な場のことである」と定義し、本研究にも用いる。本研究の対象事業は域内交流を促すものであるため、他者との関係を離れ自分という感覚を得る縮小的な場ではなく、他者との関係から自分の存在を確認できる拡張的な場を特に居場所と考える(図-1)。

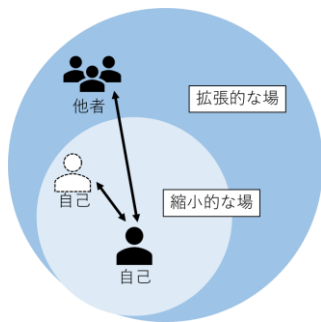


図-1 居場所の概念図

(2) 居場所を構成する要素

空き家利活用における場の設えに着目するにあたり、居場所を構成する要素を整理する必要がある。場の視点から萩原¹⁴⁾の定義した要素より3点、整理をした。また、自と他が交錯する力動的な場である居場所とその要素の影響を図-2の概念図で表す。

a) 場所性

他者や事物、自然とのかかわりにおいて身の置き所や身を浸し、住まわせることのできる「隙間」があること。

b) 時間性

他者との応答的な関係においてそのつど獲得される自

らの「位置」が方向感覚を生み、展望感覚を生み出していること。

c) 関係性

現実世界との生き生きとした活動的・応答的な関わりにおいて、世界と自己の意味が生成し、「私」という身体において感得されること。

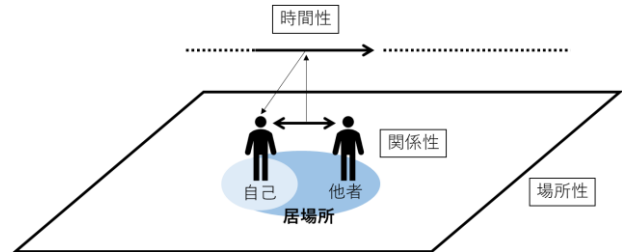


図-2 居場所とその要素の影響概念図

(3) 本研究の視座

堤¹³⁾や北山¹⁵⁾によると居場所は「無い」という感覚を通してこそ実感されるとされている。また、萩原¹³⁾によると居場所を構成する要素である関係性について「他者からの操作的で排他的な関係性、言い換えれば他者からの一方的な目論見をもった関係性や、外部に向けて偽装する自己をもって他者と操作しにかかわろうとする関係性では、生き生きとした現実との交流回路を断絶させ、自らの位置取りを見失う」とされている。つまり、居場所の有無に対して関係性という要素は重要である。この関係性のデザインについて田中・萩原¹⁶⁾は2点挙げている。1点目は「構成メンバー同士の顔が見え、直接的に関わりあい、交流し合い、共に参加し創っていくことのできるスケールを持った」小さな場を作ることである。この小さな場こそ他者との応答的な関係を生む。2点目は場が「多様性や異質性に開かれている」ことである。小さな場は同質化と固定化を招き、異質な他者を排除し兼ねず、自閉的な場となることがある。

以上より、関係性は居場所の有無に大きく影響を与えるため、本研究における居場所性を高める実践においても場の設えを意図して空き家を利活用したイベントをデザインをした。

3. 研究対象地・対象事業の概要

(1) 熊本県美里町の概要

美里町¹⁷⁾は平成16年11月1日熊本県下益城郡「中央町」と「砥用町」の2町合併により誕生した町で、熊本県の中央に位置し、熊本市から南東へ約30kmの場所に位置する。人口は令和4年5月のデータによると9,217人である。地勢は山地丘陵部が多く、総面積144.03km²の約4の3を森林が占める典型的な中山間地域である。

(2) 熊本県美里町における域内交流の現状

本研究の対象事業の説明の前に、美里町における主な既存の域内交流の場である、公民館や地区集会所について整理する。公民館は、社会教育法第 20 条¹⁸⁾に基づき「公民館は、市町村その他一定区域内の住民のために、實際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的」に利用されている。また、集会所については美里町地区集会所条例第 1 条¹⁹⁾に基づき、「水力発電所施設地域地域交付金事業により建設した美里町各地区の住民に対し、各種の研修、会議、レクリエーション、その他親睦の場を提供し、地域の発展を図るため、地区集会所を設置する」とされており、町内に 18 か所存在し、利用されている。公民館では生涯学習教室や地域活動など、集会所では体操教室や地域の自治会活動などが行われ、利用目的以外でも町民同士の安否確認の機会にもなっており、いずれも地域住民の域内交流がされていると考えられる。しかし、年齢や住まいなどの属性が同質的且つ固定的で、多様性や異質性に開かれている場は少ない状態であった。

(3) 研究対象事業の概要

Misato Kakehashi 事業（以下、本事業）は 2021 年 8 月～2022 年 1 月の期間で熊本県美里町の地域おこし協力隊兼本研究における筆者が空き家を利活用した事業である。美里町では人口減少に伴う空き家の増加や高齢化による担い手不足などが課題となっていたが、移住を促進することは安易ではなく、定住人口を増やすことだけが解決策ではなくなっていた。そこで、本事業は「関係人口を創出」を目的とし、イベントスペースとしての事業を開始した。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により町外の人を多く呼び込むイベントの実施が困難となったため、イベント企画者や参加者を美里町または県内の市町村を想定した近隣地域在住者に限定した「域内交流の創出」へと目的を変更し、事業を再設計した。事業目的と拠点に選定した空き家のそばにある石橋より事業名並びに拠点名を「Misato Kakehashi（ミサトカケハシ）」とした。

4. 場の設えを意図したイベントデザイン

(1) 空き家の立地環境

空き家の選定にあたり地区の地域性を示す。拠点に選定した空き家がある地区は美里町の旧中央町に位置する佐俣地区である。佐俣地区は旧砥用町との境に位置し、隣町である甲佐町へもアクセスしやすく、大正元年から

昭和 39 年までの 52 年間、熊延鉄道が通っていた（写真-1）²⁰⁾。住民によると鉄道は交通や運搬だけでなく子ども達の度胸試しやかくれんぼなどの遊び場であった。また、地区内を流れる津留川と釈迦院川が合流する地点にある兄弟橋の石橋は、二俣橋と呼ばれ、観光地としてだけでなく昔から川遊びなどの遊び場として親しまれている。毎年 7 月には水神祭りがあり、水害がないことを祈願する神事があるように川との近接性が高い地区である。

(2) 空き家の選定

空き家を利活用した理由は、美里町には公民館や集会所といった主に地域住民が利用しやすい施設はあったものの、一般に開放された公共性の高い空間や施設は少なかったことが挙げられる。そこで、地域内外の交流を促す場として、地域課題となっていた空き家を利活用することとした。町内各地にある空き家から元来、住民の遊び場の延長として馴染みやすく近隣からもアクセスしやすいつまり、一般に開放されやすい佐俣地区の空き家を選定した（写真-2）。



写真-1 後の空き家と熊延鉄道



写真-2 外観と石橋

(3) イベントデザインにおける場の設えの特徴

居場所を構成する要素より着眼を得て、場の設えに留意してイベントをデザインした。

- a) **場所性** 他者だけではなく、事物や自然にも身を置けるように、空き家の前面にあった住居時の目隠しとなっていた植込みは撤去し（写真-3）、活動時には、窓を開放することで川との近接性を活かして川や風の音を身近に感じることができるようにした（写真-4）。また、音楽をかけることや華やかな装飾は控え、地域が元々持つ遊び場の延長線上となる設えとした。
- b) **時間性** 他者との応答的な関係が獲得されることで自らの位置や方向感覚を生み、展望感覚を生み出すため、私的な世界へ閉じ、他者との関わりを絶つ個人作業的なイベントやワーケーション、事務所利用などは避けた。



写真-3 住民との植込み撤去



写真-4 植込み跡に座る人

c) **関係性** 現実世界との生き生きとした活動的・応答的な関わりを生み出すため、多様性や異質性に関われるような場所性に繋がる設えに加え、常時、構成メンバーが10~20名ほどになる規模又は2人以上一組で活動できるようにし、構成メンバー同士の顔が見える小さな場づくりを意識した。

(4) 各イベントの概要

本事業にて行われた全7回のイベントの概要を説明する。尚、本事業の目的である域内交流の創出以外を目的とした来訪者や周辺環境のリサーチと地域おこし協力隊の活動報告に関するイベントは除くこととする。

a) **第1回 Kakehashi マルシェ** 2021年10月31日に開催。参加者は住民と観光客の合計約50名で常時10名~20名の滞在が見られた。企画者は、町内の飲食事業者。目的は、元々来訪している観光客の滞在を促すと共に、住民の来訪と滞在を促し交流を生むことである。コーヒーやお菓子、サンドウィッチ、雑貨の販売が行われた。

b) **フットパス休憩所** 2021年11月13日に開催。参加者は住民と観光客、地域を歩いて楽しむフットパス²⁾というイベント参加者の合計約50名で常時10名ほどの滞在が見られた。企画者は、町内の観光事業者と有志の住民。目的は、元々来訪している観光客の滞在を促すと共に、住民の来訪と滞在を促し交流を生むことである。休憩所利用だけでなく、有志の住民が「ふるさとミニマルシェ」と称し、手芸品の販売を行った(写真-5)。

c) **しめ縄飾りワークショップ開催に向けた練習会** 2021年11月20日に開催。参加者は住民と観光客の合計約20名。企画者は、町内出身者(近隣地域在住)。目的は、元々来訪している観光客の滞在を促すと共に、住民の来訪と滞在を促し交流を生むことである。美里町で採れる植物を使った縄飾りのワークショップに向け、誰もが参加できる形で練習会をした。

d) **第2回 Kakehashi マルシェ** 2021年12月5日に開催。参加者は住民と観光客の合計約50名で常時10名ほどの滞在が見られた。企画者は、町内の飲食事業者。目的は、元々来訪している観光客の滞在を促すと共に、住民の来訪と滞在を促し交流を生むことである。コーヒーやお菓子、サンドウィッチ、雑貨の販売、ヨガ教室が行われた。

e) **フットパス休憩所** 2021年12月12日に開催。参加者は観光客、フットパスイベント参加者の合計約15名。企画者は、イベントc)と同じである。目的は、元々来訪している観光客の滞在を促すと共に、住民の来訪と滞在を促し交流を生むことである。企画者は美里町の野菜でつくった漬物や干し柿を参加者に味見してもらい、感想などを共有して交流した。

f) **しめ縄飾りワークショップ** 2021年12月26日に開催。参加者は住民と近隣地域在住者の15名。企画者は、イベントc)と同じである。目的は、近隣地域在住者や住民との交流を生むことである。美里町で採れる植物を使った縄飾りのワークショップをした(写真-6)。

g) **お話し会** 2021年1月7日に開催。参加者は近隣地域在住者の7名。企画者は、近隣地域住民。目的は、コロナ禍における対面交流を模索すること。企画者が話を聞きたい人を呼び、美里町での山の暮らしや畑仕事、自転車で各国を回ってみた他地域の環境など、自然と寄り添う暮らしについて意見交換をした。



写真5 イベントbの様子



写真6 イベントfの様子

5. 意識変化に関する分析と考察

本事業に関係した①周辺住民、②イベント参加者、③イベント企画者に対して意識変化についてのアンケート調査を実施した。対象者の詳細を表-1に示す。また、イベント中は参与観察をイベント企画者には振り返りのインタビュー調査をした。以上の結果をもとに考察を行う。アンケート調査における①周辺住民は拠点である空き家がある小学校区を基準に、旧東小学校区に限定し、本事業に参加したことがない方を含めているため本事業の報告書を添付し、活動についての所感も良かった。

表-1 アンケート調査対象者の詳細

項番	対象	対象者の詳細	アンケート実施日	対象数	回答数
①	周辺住民	旧東小学校区である5地区(長尾野、小庭、佐俣、岩野、石原)。尚、小岩野地区は新型コロナウイルス感染症の拡大を懸念するご意見があり実施していない。	2022年 1月25日配布	246世帯	43世帯
②	イベント参加者	美里町または近隣地域在住者で特に小規模なイベントの参加者。マルシェは不特定多数の参加のため除いた。		15名	7名
③	イベント企画者	美里町または近隣地域在住者。		6名	4名

(1) 周辺住民の意識変化

調査と分析結果を表-2に表した。

a) **地域への関心の顕在化** アンケートより本事業を「知らない」「知っている」共に、周辺住民の意識変化として「地域への関心の顕在化」があったことがわかった。特に「知っている」と回答した方からは具体的な場

表-2 周辺住民に対する調査と分析結果

設問番号	①-1		①-2		
	設問	Misato Kakehashiを知っていましたか。	活動報告のチラシを読みMisato Kakehashiがあることで地域に変化はあった(ある)と思いますか。		
分析結果	回答	—	a) 地域への関心の顕在化	b-1) 域内交流の認知	b-2) 域内交流を契機にした居場所性
	アンケート	知っている		「以前から二俣橋から熊延鉄道に集客があることを利用して出店などを活用したら良いのではないかと考えていました」「近くにある各所、旧跡場所も自分が知っている限り案内した」「直接にお手伝いすることはできないが、応援したい気持ちはある」「集客、遺産の活用など近くにも気づかないことを気づかされた」「みんな興味はあったようです。私も参加しました」	「交流の場、憩いの場としての役割を果たした」「ゆっくりくつろげる空間(場所)があると言う事は心の元気がつながる」「人と人との出会いになり、交流の場としてこれからもこういう活動していいと思います」「交流の場となっていればとても良いのではないかと」「人と人の触れ合いなど大事だと思います」「人と人の関わりが増え、友人が増え、とても良いことだと思います」
知らない			「こんなに近くに住んでいながらミサトカケハン活動をしてもらったことを全く知らずもどかし思いました」「マルシェやワークショップに参加してみたいと思いました」「知っていたら参加していました」	—	—
参与観察	事象	マルシェやワークショップの際には周辺住民から、「今日は何をしているんですか」「グラウンドゴルフのついでに見に来たよ」「何かやっているから近所の人同士誘い合ってきたよ」と声をかけられることが契機となり本事業を知ってもらうことが多かった。	「来た人が見るように熊延鉄道の写真を展示したらどうね」「観光地案内の地図をつくったほうがよいか」と声をかけてもらい、写真の展示や地図の作成を共に行った。	イベント参加者に声をかける様子や空き家をのぞき込む様子が見られた。	住居時の目隠しとなっていた植込みを撤去したこと、窓を開放することで「ここは何ね」「ここに住んでいたおばあちゃんはどうしたの」「あんだこの様さね」と声をかけられる契機となった。

表-3 イベント参加者に対する調査と分析結果

設問番号	②-1		②-2		②-3		②-4	
	設問	Misato Kakehashiで企画やイベントに参加することであなたの気持ちや状況は何か変化しましたか。	「変化した」とお答えした方には、それはどのようなことだと思いますか。		Misato Kakehashiがあることで地域に変化はあったと思いますか。	その理由をご記入ください。		
分析結果	回答	—	a) 地域の魅力発見	b-2) 域内交流を契機にした居場所性	—	b) 域内交流の実感	b-2) 域内交流を契機にした居場所性	
	アンケート	変化なし ※「変化しなかった」の回答なし		「美里町の自然のすばらしさを見ることができ、心が癒されました」「まだまだ知らない美里町の素敵なところがあることに気づかされ、いろいろ発見したい気持ちになりました」「美里町の良い所活動を通して教えていただきました」「町内外の方が魅力再発見できるイベントを続けてほしいです」	「大きな会場であるイベントと違って参加者同士が会話したりしてその場が和む、これは小さなイベント会場の特権だろうと思います」	思う ※「思わない」の回答なし	「人が集まることで地域が明るくなり、賑やかになった」「町内街の人々の交流、来た人の思いの場所になれば素敵だと思います」	「企画によって人のつながりが幅広く発展したと思った」「イベント参加中に地域の人が声がけ、立ち寄り姿があった」
参与観察		—	菓を使うワークショップの際には「よく小さいときに田植えしたよ」「かけ干して貴重らしいよ、私も羨ましいって友達に言われた」など地域のものについて話が弾む場面があった。	空き家に入る又は、空き家周辺を利用するため、常時10~20名ほどになる規模になっていた。	—	小学校、中学校の同級生との再会を喜ぶ場面があった。 飲食物を扱ったマルシェに関しては、植込みの跡や空き家の傍にある石橋の欄干、車止めなどに腰を掛けて周辺住民と話す様子など交流する様子が見られた。しかし、雑貨を扱った場合は購買行動に留まる傾向があり、交流に至らないことがあった。	—	

の活用をイメージする声や実際に行動に移したという声があった。また、参与観察の結果より「何かしている」と注意を引きつけたことが本事業を知ってもらう契機だとわかった。

b) 域内交流の認知 「交流の場、憩いの場としての役割を果たした」など域内交流の認知が確認され、「観光客と地域とのつながりの場になると思う」など域内交流を契機に多様性や異質性に開かれ、居場所における関係性が高い傾向があったとわかった。

c) 考察 イベントデザインにおける場の設えの特徴から検証内容を考察する。「地域への関心の顕在化」したのは、場所性を意図したデザインより、植込みを撤去したことや窓を開放したことで活動の合図となり「何かしている」と注意を引きつける効果があったと推察する。また、音楽をかけることや華美な装飾は控えるなど地域が元々持つ遊び場の延長線上となる設えが、周辺住民にとって親しみをもちやすくなり、注意を引きつける動線ができていた。その動線があることで、イベント参加者に声をかけたり名所を案内したりと域内交流を契機に自

と他が交錯する場、つまり居場所を持つ様子を見られたと推察する。

(2) イベント参加者の意識変化

調査と分析結果を表-3に表した。

a) 地域の魅力発見 アンケートより「美里町の自然のすばらしさを見ることができ、心が癒されました」などイベント企画者の意識変化として「地域の魅力発見」があったことがわかった。

b) 域内交流の実感 「人が集まることで地域が明るくなり、賑やかになった」など域内交流の実感が見られた。また、「大きな会場であるイベントと違って参加者同士が会話したりしてその場が和む、これは小さなイベント会場の特権」というように関係性のデザインである小さな場づくりを実感する声や「企画によって人のつながりが幅広く発展したと思った」「イベント参加中に地域の人が声がけ、立ち寄り姿があった」というように多様性や異質性に開かれている傾向があったことを実感する声があった。

表4 イベント参加者に対する調査と分析結果

設問	③-1	③-2		③-3	③-4	
	Misato Kakehashiで企画やイベントに参加することであなたの気持ちや状況は何か変化しましたか。	「変化した」とお答えした方には、それはどのようなことだと思いますか。		Misato Kakehashiがあることで地域に変化はあったと思いますか。	その理由をご記入ください。	
分析結果	-	a) 地域における役割の自認	b-2) 域内交流を契機にした居場所性	-	b) 域内交流の実感	b-2) 域内交流を契機にした居場所性
アンケート	回答 変化した ※「変化しなかった」の回答なし	「ずっとやりたいと思ってはいましたが実現するためのきっかけがなかった(中略) 継続して行けたらと思います」「自分たちでイベントを企画しやりたいと思っていたが(場所と一緒にやる仲間)などいま一歩踏み出せなかったが(中略) いつかやりたい!がやってみたい!になった」	「実際にイベントをやりたいことで次の自信につながった」「今後も継続して行けたらと思います」	思う ※「思わない」の回答なし	「美里町内外の人々の交流する場として活用された」「今後も人々の交流の場として活用されていくといいなと思います」「人と人をつながり、本物を自分で見極めていくことが大切」	「集える場所が改めてできた!という感じです。居場所としての貴重な役割を果たせると思います」
インタビュー	-	「今まで自分の趣味で(ワークショップに)誰か集まるか疑問だったけど、やってみてよかった」「ふるさと納税の返礼品や地域のおじいちゃんおばあちゃんの仕事に繋がることができそう」	-	-	「今回イベントの準備なので架け橋にしていることが多かったのですが、誰か入っているとわかると親近感で来られた方がたくさん道を聞いてこられたり世間話で立ち寄りられたりとすごく良い場所だと思いました」「地域の方も時々顔を見せに来られお年寄りの方とたくさん話ができる良い場所だと思いました」「やっぱり対面が大事!」	「私が毎日入れるのならばいいくらい大事な場所だと思っています」

c) 考察 イベントデザインにおける場の設えの特徴から検証内容を考察する。「地域の魅力発見」ができたのは、周辺住民の意識変化にて述べたような場所性を意図したデザインに加え、マルシェやワークショップの際に近隣地域に馴染みのある食材や植物を活用し、他者だけではなく、事物や自然にも身を置けるようにしたことが背景にあったと推察する。また、参与観察の結果より、近隣地域に馴染みのある食材や植物を活用した飲食物を扱ったマルシェでは、植込みの跡や空き家の傍にある石橋の欄干、車止めなどに腰を掛けて交流の様子が見られた。しかし、一般的な雑貨を扱った場合は購買行動に留まる傾向があり、交流に至らないことがあった。また、関係性を意図したデザインから構成メンバー同士の顔が見える小さな場づくりや前節で述べた周辺住民の注意を引き付ける設えから多様性や異質性に開かれやすいデザインをしたことで域内交流の実感が見られ、自と他が交錯する場、つまり居場所を持つ様子を見られたと推察する。

(3) イベント企画者の意識変化

調査と分析結果を表4に表した。

a) 地域における役割の自認 アンケートより「ずっとやりたいと思ってはいましたが実現するためのきっかけがなかった(中略) 継続して行けたらと思います」という声があり、イベント企画者の意識変化として「地域における役割の自認」があったことがわかった。

b) 域内交流の実感 「美里町内外の人々の交流する場として活用された」など域内交流の実感が見られた。また、アンケート調査とイベントの振り返りインタビューでは、「集える場所が改めてできた!という感じです。居場所としての貴重な役割を果たせると思います」「私が毎日入れるのならばいいくらい大事な場所だと思っています」との声があり、域内交流の実感だけでなく、居場所を実感していたことが分かった。

c) 考察 イベントデザインにおける場の設えの特徴から検証内容を考察する。「地域における役割の自認」したのは、場所性を意図した場の設えがイベント企画者に馴染み、主体的に使うことができたことが背景にあった。具体的には、イベントc)の企画者は他の企画者の場の使い方を参考にした後(写真7)、窓を開放するだけでなく、窓の全面を外してイベントe)をした(写真8)。また、イベントc)では、域内交流ができる場を広げ、人が寄りやすく「何かしている」と注意を引きつけるために軒先を利用して活動した(写真9)。これにより、誰もが飛び入り参加しやすくなりより多様性や異質性に開かれている場となった。実際に、サイクリングに来ていた人々が立ち寄り参加する場面があった(写真10)。このように、小さな場での共に活動する時間が長くなることで他者との関係性が高くなる傾向があった。



写真7 イベントdの様子



写真8 イベントeの様子



写真9 イベントcの様子



写真10 イベントcの様子

このように場の設えがイベント企画者に馴染み、使うことがより場の設えにおける関係性を高め、地域における役割を自認したと考える、また、社会的な役割を自認するということは他者との関係性が高く、アンケートにあるように次の自信に繋がった、継続したいなど今後何かやりたいという意識に変化し、展望感覚が生み出されて

いることから、時間性が高いことが考えられる。よって、自と他が交錯する場、つまり居場所を持ったと推察する。

(4) イベントデザインの分類と考察

以上の域内交流の実態とイベントデザインにおける場の設えより、イベントデザインを3つに分類し、それぞれにおける場所性、時間性、関係性からの居場所性を高める型を考察する。まず、本研究におけるイベントデザインは表-5に示すようにマルシェ型、休憩型、ものづくり型に分類することができる。

表-5 イベントデザインの分類

分類	イベント	場所性	時間性	関係性
マルシェ型	a, d	高い	ある	ある
休憩型	b, e	ある	高い	ある
ものづくり型	c, f, g	高い	高い	高い

a) **マルシェ型** 図-3 に示す通りマルシェ型は、「何かやっている」と周辺住民や観光客を引きつける動線があったため場所性は高いが、販売するものによっては域内交流がなく、購買行動のみの場合もあった。つまり、時間性や関係性はあるという状態に留まった。

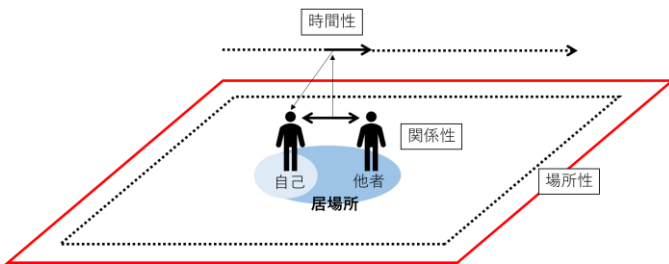


図-3 マルシェ型の場の設えと居場所性

b) **休憩型** 図-4 に示す通り休憩型は場所性を意図した場の設えを活かして「何かやっている」という様子が表れにくいため場所性はあるという状態に留まった。しかし、少人数で休憩時に域内交流が長時間されているのが見受けられたため、関係性はあるという状態に留まるが、時間性は高いと考察した。

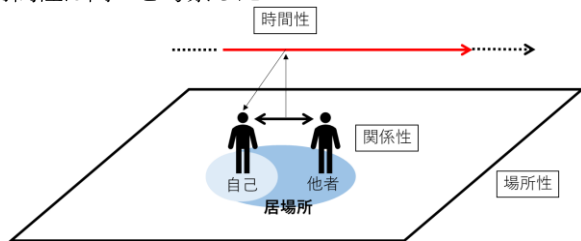


図-4 休憩型の場の設えと居場所性

c) **ものづくり型** 図-5 に示す通りものづくり型は「何かやっている」と周辺住民や観光客を引きつける動線があり場所性は高いだけでなく、小さな場での共に活動する時間が長く、今後何かやりたいという意識変化が起きやすい、つまり展望感覚が生み出されていたため時間性

も高い。また、イベント企画者が社会的な役割を自認するということは他者との関係性も高いと考察した。

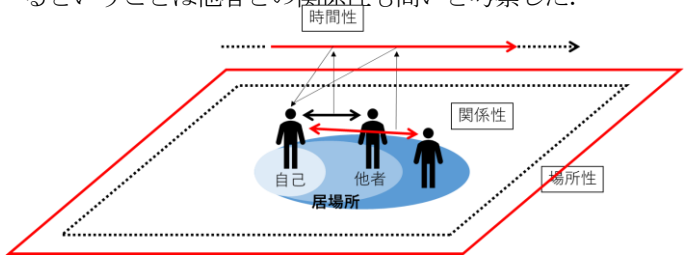


図-5 ものづくり型の場の設えと効果

6. おわりに

(1) 研究のまとめと結論

本研究では場の設えと参加者の意識変化に着目し、空き家を活用した域内交流の実態を明らかにするために、熊本県美里町で行われた空き家を利用したイベントスペースにおける①周辺住民、②イベント参加者、③イベント企画者を対象にアンケート及びインタビュー調査を行い、空き家利活用の効果について考察した。

研究の結果、①周辺住民には、「地域への関心の顕在化」、②イベント参加者は「地域の魅力発見」、③イベント企画者は「地域における役割の自認」が検証された。そして、イベントデザインにおける場の設えの特徴から検証内容を考察し、イベントデザインの分類と場所性、時間性、関係性の3つの居場所の要素から居場所性について考え、本研究における居場所性の高いイベントデザインはものづくり型だとわかった。

(2) 今後の課題と展望

研究の成果をもとに今後は、対象地域を広げて実践を重ねることでより居場所性の高いイベントデザインにおける場の設えの基準を明確にすることをアクションリサーチとしてらかにしていく必要がある。より多様性や異質性が広がった場合でも関わる全ての人の居場所性が高める研究が期待される。

謝辞：本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただいた熊本県美里町役場の皆様、ならびに、イベントに関わった全ての皆様に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 農林水産省：農山漁村のコミュニティーの維持再生，https://www.maff.go.jp/j/sy-okuiku/wpaper/h27/h27_h/book/part2/chap5/b2_c5_1_04.html (2022, 6, 1 閲覧)。
- 2) 総務省統計局：平成 30 年住宅・土地統計調査，2019, 9, 30。

- 3) 国土交通省：空き地・空き家など外部不経済対策について, <https://www.mlit.go.jp/common/000042301.pdf> (2022, 6, 1 閲覧) .
- 4) 国土交通省：空き家の活用を通じた二拠点居住の推進, 2021, 4, 23.
- 5) 総務省：関人口ポータルサイト, <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html> (2022, 6, 1 閲覧) .
- 6) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション共同当事者・時間・データ, 株式会社新曜社, 2018.
- 7) 笈田幹弘, 後藤智香子, 小泉秀樹, 角屋ゆず, 山田翔太：まちづくり活動とのマッチングによる空き家活用推進事例の研究, 都市計画論文集 53(3), 1184-1191, 2018.
- 8) 竹鼻紫, 大村謙二郎, 有田智一, 藤井さやか：伝建地区とその周辺における空き家実態とその利活用可能性に関する研究, 都市計画論文集 45.3 (0), 25-30, 2010.
- 9) 武田勇, 坂田寧代：中山間地域の低利用公共施設の利用に関する実践, 農業農村工学会誌 87 (8), 645-648,a1, 2019.
- 10) 坂田寧代：都市住民と協働した農村地域における災害復興モデル, 農業農村工学会論文集 87 (2), II_93-II_98, 2019.
- 11) 前田真子, 西村 一朗：棚田オーナー制度参加者の事業に対する意識と今後の課題, 日本建築学会計画系論文集 67 (556), 213-218, 2002.
- 12) 井上果子：山間地の伝統文化継承に見る新たな農村文化担い手の形, 農村計画学会誌 36, 375-382, 2017.
- 13) 堤雅雄：『居場所』感覚と青年期の同一性の混乱, 島根大学教育学部紀要 36, pp.1-7, 2002.
- 14) 萩原建次郎：子ども・若者にとっての居場所の意味再考, 立教大学教育学科研究年報 (53), pp.65-77, 2009.
- 15) 北山修：自分と居場所, 岩崎学術出版社, 1993.
- 16) 田中治彦, 萩原建次郎：若者の居場所と参加, 東洋館出版社, 2012.
- 17) 熊本県美里町：美里町ホームページ, <https://www.town.kumamoto-misato.lg.jp> (2022, 6, 1 閲覧) .
- 18) デジタル庁：e-Gov 法令検索, <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000207> (2022, 9, 2 閲覧) .
- 19) 熊本県美里町：美里町地区集会所条例, https://www.town.kumamoto-misato.lg.jp/reiki_int/reiki_honbun/r164RG00000447.html (2022, 5, 25 閲覧) .
- 20) 熊本県：県央広域本部サイト, <https://www.pref.kumamoto.jp/site/kenou/8153.html> (2022, 5, 25 閲覧) .
- 21) 美里フットパス協会：<https://misatofp.jimdoofree.com/>, (2022, 5, 25 閲覧) .

(Received September 30, 2022)

A Study on the Practice of Utilization of Vacant Houses in Rural Areas

Natsu YAGAI and Naoto TANAKA

According to the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, the external diseconomies caused by the increasing number of mismanaged vacant houses in Japan range from disaster prevention and crime prevention to sanitation and scenery. Therefore, in order to manage a sustainable community, it is useful to practice the utilization of vacant houses and clarify the effects of such utilization. In this study, it is conducted a questionnaire and interview survey of (1) local residents, (2) event participants, and (3) event planners in an event space using a vacant house in Misato Town, Kumamoto Prefecture, to examine the effects of utilizing vacant houses. The purpose of this study is to clarify the actual situation of exchange in the area utilizing vacant houses, focusing on the setting of the place and changes in the awareness of the participants. The results of the study verified that (1) residents in the neighborhood "manifested interest in the region," (2) event participants "discovered the attractiveness of the region," and (3) event planners "recognized their role in the region."